

現地を訪問して思うこと ～知ること・伝えることの大切さ～

窪田尚幸（1984 文学部卒）

1 はじめに

「知ること・伝えることの大切さ」・・・今回の訪問で改めて痛感したことです。現場に行かなければ、人から直接聞いてみなければ如何に分からないのか。4年前のあの歴史的な大事件の東日本大震災でさえ風化してきているとのこと。伝わっていないことの現実。だから、自ら知ろうとする姿勢、自ら伝えようと努力することがやはり大事なんだと、教育の現場に立つ者として改めて考えさせられた2日間でした。

2 被災地の現状と佐々木ご夫妻の「想い」

女川町のかさ上げ工事、新たな町、新たな駅。石巻市のボランティアガイドの方の「地震・津波・逃げろ・てんでん」「忘れられることが一番恐ろしい」の言葉。私自身ボランティア活動で3年前に訪れた七ヶ浜町。その時、町のグラウンドに高く積まれていた瓦礫の山はきれいになくなっていましたが、仮設住宅はそのまま。津波で流された家の跡もそのまま。閑上地区、瓦礫はなくなっているが、まだまだ・・・。

今回の訪問で私にとって最も伝えなければと切実に思ったのが、かまぼこ会社「ささ圭」の佐々木圭亮さん、靖子さんご夫妻の想いです。

勉強会での圭亮さんのお話。「2011年3月11日14:46。地震4分くらいか。最後の揺れで2m位飛ばされた。1時間6分後に津波の第一波。他の地域よりも遅かった。津波が来るとは思っていなかった。5000人の町。3000人がその時いた。家の中で地震の片付けをしていた。死亡800人弱。津波たいしたことない。来ても50cmか。砂浜には大きな津波は来ないと思っていた。チリ大地震の時、閑上は被害がほとんどなかった。高をくくっていた。2011年3月11日、工場すべてががれきとなった。それから4年8ヶ月、今6割ちょいの売り上げに回復。新しい物づくりをやっている。味付けを忘れてしまった。元の味に戻そうとやっているが、嗜好も変わっているので、日々替えている。宮城県のかまぼこ生産は、震災前は1位だったが、今は3位。93歳の父親が会長。2011年7月から手作りの笹かまを始めた。息子が去年大学を卒業し、1年手作りのかまぼこを作った。後継者ができた。前向きになった。金融機関も後継者がいないとお金を貸してくれない。震災前も借入れ、その後もさらに借入れ。負債を少しはカットしてもらった。製品を出荷しても放射能の検査をするお金もかかる。海の産物なので。今、アラスカから原料は輸入している。円安で原料が高くなっている。復旧・復興のために、現地に見に来てほしい。物を買う、食べる。町の復興が遅い。仮設住宅を早く終了したい。自分の手で立ち上がる。もらうのが当たり前になってしまい、朝からパチンコする人、仕事をしない人がいるのも現実。」

靖子さんのお話。「今、かまぼこを作ることができていることがとても幸せなことだと

実感している。震災前は、そんなこと思わなかった。復興の道は、借金を返す道。出会いを大切にしながら。3年前に新たな工場ができたが、80種類くらいのレシピは全て震災で無くなった。レシピを再度作り上げるのに全力。試食、試作を重ねて、震災前の味に戻りつつある。復活することに苦心。今、新しい製品作りに取り組んでいる。昨年作り上げた「みやぎの雫」。県内産の野菜を入れる。3代目の息子が深く関わっている。11月に海鮮かまぼこを発売。社員も育ってきている。本当にこの商品でいいのか。製品を磨き上げていく。作り直していく。笹かまぼこがメインだが、新たな商品開発も。」

お話をお聞きした後、私は失礼かと思いながらも、次のような質問をしました。

「いろいろなお苦勞があり、その様子がよく分かりました。特に、社員も育ってきていること、新たな商品開発のことなどとても前向きにされていて感銘を覚えました。ただ、そこに至るまではきっととても大変だったことと思います。できれば、そのマイナスをプラスに転じるきっかけ、そこでの経緯や想いをもう少し詳しく教えて頂ければありがたいです。私自身もそうですし、そのことを子どもたちにも伝えたいと思うので。」と。

そして、靖子さんが次のようにお答え下さいました。

「3ヶ月後に手作り、1年後に工場を復活したが、そこまでの道のりは簡単には言い尽くせない。3人の社員が亡くなった。前にも後ろにも進めない。廃業するしかない。社員に話をした。みんなで泣きに泣いた。どうしようもない。ただ、このままでは終わらせられないと主人はずっと言っていた。主人の両親は、借金が膨らむだけだと言い、私も一人息子に負の遺産を残してしまうことは、母としてつらい。でも主人は、休業にして再起の道をと。私は経営者の妻として主人の足を引っ張っていた。楽になりたい・・・妻として失格だったと思うようになった。主人は、つぶれてしまうのなら、その時にこそ試されると。主人が再起を図ろうとしている中、私も気持ちが段々切り替わっていった。現在、93歳の父、その時は89歳、関上小3年生の体験授業で子どもたちに笹かまぼこ作りを教えていた。ささ圭のおじいさん、おばあさんが小3になると来るんだよと言われていた。錆びた金属串と石臼しかなかったが、錆びた串を磨き続ける義父。原点に戻って、手作りの笹かまぼこ作りを。それをやるしかない。それをやると決めたら、今までにない力が出てきた。社員も戻ってきて、とにかくある物で7月1日をめどにお店を開けよう。それから前を向いて、後ろを振り返らなかった。」

心の奥底にまで届く非常に重いお話でした。

3 おわりに

この訪問体験をもとに資料を作成し、先生方に配って子どもたちへ話をしてもらおうと考えています。また幸いなことに、5年生の学級担任から「教頭先生、是非、授業をして下さい。」との申し出もありました。2日間の体験をもとに、自分なりに被災地の現状と佐々木さんの想いを子どもたちにしっかり伝えたいと思います。